
緒言

特集：変貌するアジアと観光

今回の特集のテーマは、アジアを対象としている。まず、アジアの範囲について確認しておこう。今、私の前に地球儀がある。地球上で最も広い大陸であるユーラシア大陸が広がっている。アジアは、その大部分を占めている。トルコのある小アジア、アラビア半島、インド亜大陸。さらに、太平洋やインド洋に点散在する島々にもアジアに含まれる国や地域がある。地図帳（「詳解現代地図」二宮書店）で面積を調べてみた。およそ、5,000万km²である。その中でアジアは4,300万km²で、ユーラシア大陸の86%を占めていることになる。

次に、本号に掲載の論考の対象地域をみると、王承云は上海を事例としつつ中国の沿海部を対象にしている。小松原尚は、中国、特に上海、オーストラリアなどアジア太平洋地域も視野に入れている。亀山恵理子はインドネシア・西ジャワ州をフィールドに、歴史分析では千住一は台湾、朝鮮、旧満州、西田正憲が台湾、朝鮮を対象にしている。井原縁はアジアを俯瞰しつつ東アジアへと論を収斂している。最後に竹田義則は、中国の大都市、北京や上海を意識しつつ、奈良県五條市を紹介している。

これらの地域の分布を地図上で確認してみると、おおよそ東経100度から145度の範囲に含まれていることがわかる。時差にして3時間圏である。この側面からすると距離的に近い関係にあると考えられる。一方、緯度差をみると北緯50度付近から南緯10度近辺までである。この範囲の気候差に注目すると、北は冷帯から温帯へ、そして低緯度地方は熱帯となる。地球上のエクメネ（居住地域）を構成する気候帯がほぼ網羅されている。

また、当該地域は東西は3大洋の中の太平洋とインド洋をひかえ、ユーラシア大陸とオーストラリア大陸に挟まれた海域と考えることもできる。その範囲に、大小の島々や半島で区切られた付属海が存在する。北方から、オホーツク海、日本海、黄海、東シナ海、豪亜地中海である。ちなみに、地中海は

陸域に囲まれた閉鎖海域のことをさす。世界で最も広い地中海は北極海であり、それに次ぐのが豪亜地中海である。したがって、この地域を論ずる際に、気候文化を形成する要因として、また、交通路としての海洋の存在を抜きにはできない。また以後、この地域を「豪亜交流圏」と仮称する。

さて、本特集のもう一つキーワードは観光である。その点に注意しつつ、本号に掲載の論考の内容をみておこう。各論文の内容に基づいて整理すると大きく3つの観点に整理できる。まず、第一に、産業の立地・配置と人的流動に関するものである。王、小松原、亀山の論考が含まれる。第二に戦間期を対象にした観光行動の分析や観光対象の形成過程の整理という歴史研究である。千住、西田の著作がそれにあたる。そして、第三に景観形成に関する研究である。「なぜそこにそれがあるのか」という問いに対して、社会的文化的因果関係から解を求めるものや、そうした環境を歴史遺産としてとらえ、その利活用の現段階的意義を観光とのかかわりから考察するものである。井原、竹田の論文が該当する。

次に各論文の内容を概観しておこう。まず第一のカテゴリーに分類された論文からみておこう。王は上海を事例としつつ中国における多国籍企業の研究開発部門の立地動向を丁寧に分析している。大都市圏への機能集積と人口集中の指摘がなされて久しい。王の研究は生産機能の高次化と専門職労働力の大都市圏への移動のメカニズム解明にも迫るものである。また、専門職労働者もリフレッシュのために観光やレクリエーション活動に参加することが多いので、都市生活者の観光サービス需要への対応を検討する上でも重要である。小松原は、近年関心の高まっている訪日外国人観光客の動向とその観光対象としての産業立地とのかかわりについて論じている。その中で、中国からのアウトバウンドに注目し、「豪亜交流圏」の観光における中国市場をめぐる獲得競争の状況を整理している。亀山はインドネシア・西ジャワ州において10年ほど前から始まった日本人学生の農村民泊活動に論及している。宿泊者である大学生とコミュニティの双方への影響を含めた考察は興味深い。

第二のカテゴリーにおいては、千住は戦間期における観光研究動向を台湾、

朝鮮、旧満州に関して整理している。この時期における日本植民地における観光現象を「様々な主体による多方向への人間の移動」と指摘した点は現段階の人的流動構造解明にも示唆を与えている。さらに、西田は朝鮮の事例との比較を行いつつ、台湾を対象に、戦前期における国立公園制度の受容、浸透過程をしっかりとらえている。

第三のカテゴリーにおいては、井原が「国際園芸博覧会」を素材にしながら、都市空間の整備における「自然」環境の受容の東アジア的特質を論じている。「豪亜交流圏」は、東南アジアの熱帯雨林（ジャングル）に、種の宝庫をかかえており、「種子戦争」をも予感させ、その意味からも今後の展開に興味がわく。最後に竹田は、奈良県の先進事例を検討しつつ、近年日本国内においても議論の高まっている中国の大都市、例えば、北京や上海などにおける開発の議論を念頭に、奈良県の歴史的街並み保存の実践事例を紹介している。保存のための補助金の運用が、彼我の国それぞれの社会制度の差異はあるものの、それを利用する人間の自由な発想と行動をどのように担保するかがカギとなっていることをうかがえる。

最後に、今号の特集に至る経緯を述べておきたい。本誌に寄稿したメンバーの大部分は、奈良県立大学で実施している、「アジア大学間ネットワーク構築推進事業」を担っているスタッフである。この事業は、中国、韓国、台湾の大学との学術交流を活発化することを目的に活動している。中国の場合、2009年4月1日に奈良県立大学と上海師範大学旅游学院との交流が始まり、2010年10月6日には、両大学の間で学術交流協定も調印された。その際には、記念シンポジウムを開催し、西田がコーディネーターをつとめ、王はパネリストの1人として活躍した。

そして、協定締結に先立つ2010年8月2日にはそれぞれの大学で研究活動に従事し、学問的専門分野も共通する部分の多い、日中の2人の研究者が上海師範大学にて研究発表を行った（中日観光地理検討会）。この時、上海師範大学からは王が、奈良からは小松原が発表した。この研究交流は、上記協定の締結とその記念シンポジウム開催のための先行成果ともなった。さらに、年度末の2011年3月には、上海師範大学において、中日人文地理・観光研究

所の設立のはこびとなり、その開所記念式典の中で記念セミナーが開催され、小松原も招待を受けて講演を行った。

これら一連の発表は2010年度の県費による共同研究である「東アジアの観光交流圏に関する研究」（代表者：小松原）の成果の一部でもあり、その概要は既に公表している（奈良県立大学「年報」3：8-10,2011）。そして「アジア大学間ネットワーク構築推進事業」が始まって満2年が経過した今年度は、日中にまたがる大学間交流は新たな段階に迎えている。

そこで、こうした研究成果を深化させるとともに、本学の地域創造学研究とも連携づけることが一層必要になっている。そのためには学内外において研究活動に従事している各界の方々との共同研究体制の確立が不可欠との認識から、「東アジアにおける大学間学術交流の推進に関する研究」（代表者：小松原）をテーマとして、研究会費による共同研究を行っている。

今回の特集は、旧年度の共同研究参加者を中心に、新たなメンバーの参加を得て編んだ。したがって、本書は、2010年度共同研究の成果をなすとともに、今年度の研究活動の一環でもあるという二重の意味を有している。そして、われわれの研究は東アジアから「豪亜交流圏」へ、そして関連域へと広がり様相をみせている。こうした形の地域研究の組織的定着には、未だ一層の時間と予算を必要としている。このような欲張った試みが受け入れられるか、諸賢の判断を待つしかない。

最後になったが、齋藤宗之・講師には寄せられた原稿の点検で大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

2011年9月

小松原 尚